

手塩にかけた米作り



～八百津高校～

生徒指導部長 亀谷信幸

今年の初夏のある日の放課後のことでした。「先生、僕の祖父が育てた米を食べてみて。」と、ひとりの3年生の生徒が自宅の田んぼで昨年の秋に収穫した米を私のところに持ってきました。以前に私とその生徒の2人で米作りの話をしたことを思い出しました。その生徒の家では、おじいさんが、田起こし、苗代の耨蒔き、田植え、稲刈り・はざ掛け・脱穀などのすべての作業をこなしているそうです。その自慢のお米を持ってきてくれたのです。早速、その日、我が家の夕食でご相伴にあずかりました。家族揃ってその米の美味しさに感動しました。

私の自宅は可児の街中にあり、田んぼもあるのですが、今では田植えさえ近所の人に頼み、稲刈り脱穀も農協のコンバインという、すべて機械任せです。収穫後に農協から自宅に運ばれたときにはどこの田んぼでとれた米かわからなくなってしまうほどです。ですから、額に汗を流して収穫したお米を久しぶりに食べたのです。

1学期の終業式に、このおじいちゃんの手塩にかけた米作りの話を全校集会の場で話しました。『この手塩にかけた米作りは、八百津高校でのみんなの3年間に似ていないか。入学式には、上級生がピカピカに磨いた教室（田んぼ）に初めて入り、1年間いろいろなことがあり、時には授業で褒められ、あるいは叱られ、また、授業がわからなければ放課後遅くまで先生に指導を受けます。部活動では上下関係を先輩から学び、クラスで困ったことがあれば担任の先生に相談します。新しい友人と喧嘩をして仲直りをします。そして1年、2年、3年生とさまざまな学校行事に取り組みます。小さな学校ですので顔色や顔つきに変化が現れると、すぐに担任の先生やクラスや部活動の仲間や顧問の先生が声をかけます。広い田んぼで、機械任せで誰が育てたかもわか

らないような米ではなく、小さな学校（田んぼ）でさまざまな友人や先輩あるいは先生に声をかけられ、叱られ、褒められ、八十八の手間をかけられたみんなは、きっとどこの田んぼでとれた米よりも美味しいに違いない』と。そして、その話の最後に、「3年生のみなさんは、この秋が収穫の時期です。9月の体育大会と就職試験、10月終わりの文化祭と上級学校の入学試験。これらの行事や試練を無事乗り越えて、りっぱな稲穂に育ってください。」と話をまとめて終わりました。

9月4日体育大会、3団の団長が開会式で「八百津高校の歴史を塗り替える体育大会にします。」と



大きな声で宣誓したとおり、これまでの体育大会の歴史を塗り替えたすばらしい体育大会となりました。10月30日・31日の文化祭、この拙文を町民のみなさまが読まれている頃には、また新たな八百津高校の歴史を刻んでいることでしょう。たわわと実った稲穂の収穫はもうすぐです。町民のみなさま、これからも温かくお見守りください。

